

## 7 ホイットマンの『草の葉』

ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) の『草の葉』 (*Leaves of Grass, 1855-92*) は1855年、当時36歳の無名のホイットマンが自費で出版し、以来37年にわたり増補と改訂を重ねた詩集である。英語詩の伝統的な詩形や韻律を用いない自由なスタイルで書かれ（これを**自由詩 (free verse, vers libre)** の先駆けと見る評者も多い）、アメリカ詩がイギリス詩の模倣を脱し独自の道を進むことを可能にした画期的な詩集である。

『草の葉』は多様な解釈を許容する巨大な作品であり、例えばこれまで、民主主義、汎神論、マテリアリズム、身体論、同性愛、東洋思想的要素、その他数多の観点から解釈されてきた。ここでは『草の葉』を特徴づけるキーワードの一つだけ紹介したい。それは詩篇「ぼく自身の歌」(“Song of Myself”) の第一行目にある“celebrate”である。初版(1855)では“I CELEBRATE MYSELF”と大文字で強調されていた。この一行を皮切りに、彼自身のみならず、道で出会う人たちを、男を、女を、肉体を、山川草木を、雑踏であふれる都会を、国土の至る所で働く無数の「普通の人々」を、当時発展途上のアメリカという若い国を、そこに集まる民族や文化を、ひいてはこれらすべてを今ここに在らしめた歴史と宇宙全体を、ホイットマンは“celebrate”していく。かつて天地を創造し被造物のすべてを「よし」とした神を想起させるように、ホイットマンもあらゆるものを肯定する。

とりわけその肯定精神が向けられるのは、小さきもの、瑣末なもの、平凡なものたちである。ホイットマンは「ちっぽけなものがぼくにとっては何ものにも劣らず大きい」(“Song of Myself,” 93) と歌い、それらの存在を愛で、それらがこの世に出来たことをしゅったい賛美する。“divine average”というよく知られた詩句が示すように(“Starting from Paumanok,” 56)、ホイットマンにとっては平凡なものは「神聖」なのである。

なぜ平凡なものが「神聖」であり「大きい」のか？ 『草の葉』では一輪の花でさえ「何千年もかけて咲き出でたもの」(“Song of Myself,” 108) と歌われる。平凡な花でもそれが今ここに存在するまでには気の遠くなるような長大な生命の連鎖と変化の過程があった。それは無限とも思える膨大にして複雑な過去からもたらされた一粒の滴の如き貴重な一者である。それを考えればあらゆる存在が「奇跡」(“Starting from Paumanok,” 57) でもある。

そしてその平凡なるものの体内にはすでに次の生命(子孫たち)が未だ形を成していない状態で潜在しており、それらが生まれればやがて無数に殖えていく(ま

さに「草」のイメージである)。どれだけ平凡な一者であっても、それは未来に対して多大な貢献をなす可能性を秘めた母胎でもある。

また『草の葉』では腐食や死でさえ忌むべきものではなく貴重なものとして“celebrate”される。土中の死体は生の終焉ではなく他の生命への滋養という目に見えない寄与的な形で新しい生の始まりであるとされる。「ぼくは土に身をゆだね、愛する草から萌え出ずる」(“Song of Myself,” 124)と死後の再生を歌ったり、他の生物の死体が糧となって今のこの自分を生かしてくれているがゆえに自分の体を借りて「生きているのはむしろ死者である」(“Pensive and Faltering,” 467)という逆説を歌ったりする。

こうした万物の寄与の要素をホイットマンは詩の言葉にも重ねて見ていたと考えられる。植物が受精して殖えていくように、詩の一行一句でも読む人の精神に受精すればそこから様々な新しい意味、認識、思想が生まれ、それがさらに未来の何かに寄与していくという含意が『草の葉』には見られる。

ホイットマンの“celebrate”は、卑小なものを偉大にし、無価値と貶められていたものに価値を見出す一種の認識革命であった。このような『草の葉』に感化された後代の詩人から、土地や民族性を称揚する「ルネサンス」を冠した文学運動を牽引する詩人たちが出てきたのは当然であった。例えばサンドバーグ (Carl Sandburg, 1878-1967) は「シカゴ・ルネサンス」を、ヒューズ (Langston Hughes, 1902-1967) は「ハーレム・ルネサンス」を、ギンズバーグ (Allen Ginsberg, 1926-1997) は「サンフランシスコ・ルネサンス」を、さらに海を越えてスコットランドのマクダーミッド (Hugh MacDiarmid, 1892-1978) は「スコティッシュ・ルネサンス」を牽引した。

パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) が「彼こそはアメリカである」(“What I feel about Walt Whitman,” 145) と評したように『草の葉』はきわめてアメリカ的な作品だが、イギリス・アイルランドの主要な詩人・作家をも惹きつけた。テニソン (Alfred Tennyson, 1809-1892)、ステイーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-1894)、ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) は『草の葉』に重大な関心を示した。20世紀には各国語への翻訳も進み、A・ジッド (仏)、T・マン (独)、C・パヴェーゼ (伊)、J. L. ボルヘス (アルゼンチン)、P・ネルーダ (チリ) に多大な影響を与えた。『草の葉』の文学性はもはやアメリカ文学・英語文学の枠内では捉えきれない広がりを見せている。

(加賀 岳彦)